

# 自然から生命力の美

## 第九回松伯美術館花鳥画展

四十歳以下の作家を対象にした公募展「第九回松伯美術館花鳥画展」が始まった。大賞に選ばれたのは台湾からの留学生の作品だ。自然と人間の調和した関係が崩れてしまった現代、花鳥画に存在意義があるとすれば、それはどのようなものかを静かに語りかける。

京都市立芸術大学大学院一年、陳宜青さん(27)の「かぼちゃ」



「ヤ」。淡い色調の葉が画面を覆い尽くす。目を凝らすと、その奥に実が見える。

故郷台湾で開かれた日本画展に魅せられ一年前に来日した。だが、作画技術はなかなか上達しない。周囲の学生の作品に圧倒された。鉛筆を持つ気になれず大学周辺をぼんやり歩いた。

来日からほぼ一年の昨夏のことである。

大学裏手の畑で日光を受けて輝くかぼちゃが視界に飛び込んできた。座り込んで見入った。一週間通い、自分が畑の一部になったような気がした時、「自然にスケッチの手を動かしていた」。

年末にスケッチを見直し、かぼちゃを作品にすることを決めた。実りをはぐくむ自然の力を表現したいと考えたのだ。武蔵野美術大学教授の那須勝哉さんは「隅から隅まで気持ち

## 「自分が畑の一部に」

なめられている。描き手が時間をかけて実際に対象に接し、自然と一体感を感じる境地に達したからだろう」と評価する。

花鳥画は中国の宋・元代に確立し、日本にもたらされた。京都教育大学名誉教授の高橋厚晴さんは「かぼちゃ」に「中国の自然観が映し出されている」と言う。「空気が澄々たり流れるような懐の深さがある」

陳さんは、台湾では、自然の表面的な美しさを追い求めているという。人間が自然に手を入れ、思い通りに整えようと自然と感じていた。日本で一人、思い悩んだからと、自然の内側からあふれ出す生命力の美に気付いたのだ。「ようやく本当の意味で自然と対話できた」

京都市立芸術大学大学院長の上村淳之さんは「花鳥画にはそうした対話が必用」と強調する。「生活の欧米化が進み、東洋でも自然は人間の方で征服できる」という考え方が受け入れられ、今回の大賞作は、人間は自然に教わり、導かれるものだという花鳥画の本質を教えてくれる」

## 大賞に台湾留学生・陳宜青さん

27



### 「かぼちゃ」

花鳥画展では、八十一歳から選ばれた大賞、優秀賞の五点を含む入選作二十五点を紹介している。それらに共通するのは、見る者を一瞬にしてとらえる派手な作品ではないということだ。

日展評議員の濱田昇児さんは「二生懸命制作する思いを、どれだけ絵に表せるかが重要」と言い切る。東京芸術大学大学院教授の宮嶋正明さんは「現代人はすべてにおいて速いことをよしとする。だが今展では、ゆっくり育っていく作家を見つけ出したい」と話す。

「こうした意見を受け、これまで出品者がどう成長したかを見てみたい」という声もあがった。来年、花鳥画展は十回の節目を迎える。上村さんから、年齢制限の枠を取り払い、花鳥画の現状を幅広く見てはどうかという提案もあった。花鳥画展は新たな展開を見せようとしている。(木村 未来)